朝

暮らし

京のひと

副知事
山下晃正さん

やました・あきまさ　1952年生まれ。府庁で商工畑を歩き、商工労働観光部長、企画理事を経て2月28日副知事に就任。家族は妻と一男一女。趣味は週1回の水泳。

副知事に就任した山下晃正氏は経済界に広い人脈を持つ。伝統産業とグローバル企業が併存する京都の産業政策をどう展開していくのかを聞いた。

――府庁生活で一番印象に残っていることは？

若いとき、天然砥石（といし）の振興担当で（南丹市の）産出現場に行った。水や石がポトポト落ちて来る坑道をずっと入ると奥で何人かが掘っていた。何かあったら終わりだと思ったが、こういう所で100万円もする高級品を掘り出している。すごいな、働くというのは、と思った。

――府内の経済情勢をどうみていますか。

1月の産業界の新年会を見ていると、政権交代後、空気は明るくなった。ただ、好景気を中小企業が感じるところまではいっていない。ここ1年でどうやって中小企業に明るい気分が現れるようにするかが課題だ。

――府の成長戦略は。

1990年に産業活性化プラン

食のセンスや感覚、継承を

を担当していたときのキーワードが『生活文化』と『グローカル』。20年追い続けているテーマだ。国際競争力を維持する産業をやっていくときにハイテクだけでは持続できない。京都が1200年積み重ねてきた文化が入れば簡単には追い抜かれない。もう一つはグローカル。京都市を中心としたエリアや、丹波のように食で知名度があるところなど地域の特性をグローバルな視点で生かさなければいけない。京都はすごく資源があるが十分生かし切れていない。

――安倍政権が日本食など京都の持つ資源を経済成長に生かそうとしています。

京都発で日本食（の世界無形文化遺産登録）を提案している。食に関する美的センスや味に対する繊細な感覚など、大事なものを継承していかなければいけない。継承のしくみをどこで作るか。それは京都だと思っている。

（磯貝秀俊）